

授戒会焼香師をおつとめして

加茂法話会 令和三年六月二十四日

去る四月二十五日、大本山永平寺報恩授戒会晡時の焼香師をつとめて参りました。新型コロナウイルス感染症の為、一年待つての授戒会厳修となり、また、感染が広がり、予断を許さない状況の中ではありませんが、細心の注意を払いながら、二十名の団員と共に、お陰様にて無事つとめを果たすことができました。

殊に、昭和五十九年授戒会焼香師を拜命しながら、果たせずに遷化した先師と共に高祖様へ報恩の誠を捧げさせて頂き、感慨無量でした。また、四十八名の方々より、把針して戴いた二十五条の刺子の糞掃衣を搭けておつとめできました事も無上の喜びでした。師匠や袈裟を把針し、参加できなかった方々も一緒に高祖様の懐に抱かれて、焼香をさせた頂いた思いでした。

そして、この度の本山参拝で一番感じたことは、行持の継続の大切さということです。道元禅師は、『正法眼蔵』「行持」の巻で、

『諸佛諸祖の行持によりて、われらが行持げんじょう見成し、われらが大道ちうだつ通達するなり。われらが行持によりて、諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するなり。われらが行持によりて、この道環の功德あり』と、お示しです。

つまり、「諸仏諸祖が代々行持し、受け継ぎ伝えてきたことによつて、私達はその行持を行うことができる。また、今の私たちの行持によつて、諸仏の行持がいまここに現れている。絶え間なく継続されてきた修証一如の行持の功德が今ここに現れている」と言われるのです。

一週間に渡る報恩授戒会は、永平寺で長年行われてきた重要な年中行持です。ましてや、昨年は中止され、もし、今年も行われなければ、大衆は三年間授戒会に会うことができないことになり、安居中に授戒会に会わずに乞暇する大衆がほとんどになってしまいます。

監院老師に拜問の折「不老閣猊下の御慈慮を賜り、感染が広がる中、三十名に絞った在家の戒弟をもお断りし、一年目と二年目の大衆百十数名が戒弟となり、説戒を薬石罷中心にして聴聞し、檀上礼、仏祖礼を日中諷経に入れたりして、全大衆が随喜できるように工夫して、授戒会日鑑にそつた行持をし、懺悔道場と正授道場には、近隣の尼僧さんと永平寺従業員四十名の参加を得て、四衆(比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷)の戒弟を揃えて行う」と承りました。これこそまさに行持の継続がなされたといえるのではないのでしょうか。

永平寺が開かれて七百八十年近くになりますが、日々の行持が脈々と受け継がれています。この新型コロナウイルス感染症の広がりの中、なすべき行を続けていくことこそが、ウイルス禍を乗り越えていく大きな力となることと確信した次第です。

(永平寺孝順会会報誌への掲載原稿)

*傘松5月号掲載の八十世南沢道人猊下の御垂示から

「現在の社会状況における宗教指導者や僧侶のあるべき姿、果たすべき役割をどのようにお考えですか」という問いに対して

自粛という事においては、今まで通りの御開山道元禅師様がお示し頂いた規則正しい日常生活にあるのだと、そして日常生活の中にある謙虚な生き方というのが禅の御教えだろうと思います。お互いが自分自身、自分のわがままを少しでも抑え、規則正しい生活習慣を確立して、そこにはじめて本当の自由な生き方が生じてくる。その教えを修行僧たちに受け継いでもらいたいし、永平寺をお参りの方、全国の檀信徒の方々に身体で味わっていただきたい。